

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

日時	令和6年2月2日（金）午前10時～午前11時15分										
場所	羽島市役所301会議室										
出席者	<p>（生涯学習都市推進会議委員）出席者17人（欠席者3人）</p> <p>松井 聡 委員（市長） 前田 京子 委員（女性団体代表） 坂田田 壽子 委員（社会教育委員代表） 岩田 清顕 委員（PTA連合会代表） 小森 博昭 委員（スポーツ推進会議代表） 森山 健 委員（小中学校代表） 下野 宗紀 委員（高等学校代表） 大野木 真 委員（自治委員会代表） 小林 美雪 委員（学識経験者） 石黒 恒雄 委員（副市長） 森 嘉長 委員（教育長） 三輪 弘司 委員（健福祉部長） 横山 郁代 委員（健福祉部子育て・健幸担当部長） 加藤 光彦 委員（産業振興部長） 小川 剛矢 委員（障がい者支援団体代表） 加藤 悦子 委員（公募委員） 田谷由紀子 委員（公募委員）</p> <p>（事務局）</p> <table border="0"> <tr> <td>伊藤佳津子 市民協働部長</td> <td>岩田 睦巳 生涯学習課長</td> </tr> <tr> <td>北垣 圭三 市民協働課専門官</td> <td>柴田 泰宏 スポーツ推進課長</td> </tr> <tr> <td>番 重宗 図書館長</td> <td>高橋 浩之 学校教育課長</td> </tr> <tr> <td>浅野 貴久 危機管理課長</td> <td>大橋 寛子 生涯学習課主幹</td> </tr> <tr> <td>吉田 智紀 同課係長</td> <td>牛田紗耶香 同課主事</td> </tr> </table>	伊藤佳津子 市民協働部長	岩田 睦巳 生涯学習課長	北垣 圭三 市民協働課専門官	柴田 泰宏 スポーツ推進課長	番 重宗 図書館長	高橋 浩之 学校教育課長	浅野 貴久 危機管理課長	大橋 寛子 生涯学習課主幹	吉田 智紀 同課係長	牛田紗耶香 同課主事
伊藤佳津子 市民協働部長	岩田 睦巳 生涯学習課長										
北垣 圭三 市民協働課専門官	柴田 泰宏 スポーツ推進課長										
番 重宗 図書館長	高橋 浩之 学校教育課長										
浅野 貴久 危機管理課長	大橋 寛子 生涯学習課主幹										
吉田 智紀 同課係長	牛田紗耶香 同課主事										
内容	<p>1 会長あいさつ</p> <p>2 意見交換 羽島市生涯学習都市づくり5カ年計画に基づく令和5年度の主な取り組みについて（事務局より資料1に基づき各分野別の取り組みを説明）</p>										

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

【質疑応答】

「1 家庭」 資料1 P.1～2

(委員) 子どもたちへの見守り、また家庭教育では学校でのメディアコントロールの取り組み等、感謝申し上げる。毎月、家庭教育を実施する日ということで、ニュースレターが配信されている。ニュースレターでは子どもたちとのコミュニケーションの取り方などが書いてあり、親として勉強になるが、ニュースレターはどのぐらいの方に読んでいただけていると考えているか。

(事務局) ニュースレターは小中学校の保護者を対象にしている部分が強く、市民全体に読んでいただいているとは捉えていない。また、問い合わせ等は今のところ届いていない。

(委員) ニュースレターは親として気づかされる点があり、多くの方に読んでいただきたい。思いやりのある子が多くなるよう、より一層取り組んでいただきたい。

また、8の付く日は早く家庭に帰る日と言われているが、サラリーマンが早く帰るとするのはなかなか難しい。羽島市のみならず近隣市町を含む企業に広く発信していただくとよい。

(会長) 周辺市町で構成する岐阜連携都市圏の会議にて、早く帰る日等のご意見についてお知らせする。

「2 青少年」 資料1 P.3～5

(会長) 不登校児童生徒への段階的支援は行政としても特に力を入れている。目的と現在の効果等について紹介いただきたい。

(委員) 不登校や学校のあり方について報道等でも話題となっているが、羽島市では不登校を問題行動と捉えないというスタンスにおいて様々な取り組みを行っている。とりわけ学校に行きづらい子どもたちへの対応として、今までは学校外に適応指導教室こだまを開設していたが、学校施設ではないため、例えば理科の実験や本格的な調理実習等には対応できないなど、教育活動に制限があった。そういった対応も含め、小熊小学校に教育活動が行える機能を備えた教室として適応指導教室のぞみを開設した。あわせて、メタバースといったICTを有効活用した仮想空間での対応を行っている。

しかし残念ながら、1点目に不登校の児童生徒数は昨年度に

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

比べて増加傾向にある。これは国、岐阜県、近隣市町も同じであり、様々な取り組みをもっても減少しないというのが現状だと思われる。ただ資料の適応指導教室利用者数にあるように、学校内にある適応指導教室のニーズが高いということ、つまり学校には行けないが、学校に準じる教育活動を希望する児童生徒がいるということであり、一定の効果はあると思われる。

もう1点は不登校とひきこもりの関係である。残念ながら学校職員とコンタクトが取れていない児童生徒がおり、実は顔を見せていただいたことがないような場合もあるが、学校職員の努力や取り組みの効果もあり減少傾向にある。年度当初は15名程度であったが、現在は減少して9名程度となっており、どの児童生徒ともコンタクトがとれる体制を目指している。

参考までにひきこもりと不登校の関係だが、現在ひきこもりになっている方の小中学校時における不登校経験の割合は、年齢が高い方に比べ低い方のほうが、パーセンテージが高いと出ている。何とかこの小中学校の段階において、学校や地域、社会と繋がり、さらに適応指導教室やR o o m-H I K A R Iにおいては、子どもたちの学びを繋ぐ、学びを止めない事が目的であるため、今後さらに充実させていきたい。

(委員) 子ども本人への段階的支援も大切だが、子どもたちの背景にある家庭や地域の影響も大きいのではないかと思う。保護者への支援があれば教えてほしい。

(事務局) 保護者とはスクールソーシャルワーカーがコンタクトを取りながら、子どもたちが居場所を確保できるように動いている。ただ、全ての保護者がコンタクトに応じてくれるかという点と難しく、子育て・健幸課、中央子ども相談センター、時には警察の協力を得ながら、保護者もケース会議に参加し、どう進めていくか話し合いを行っている。

(会長) 羽島市は「児童生徒のいじめの防止等に関する条例」を県下で2番目に策定しており、年2回いじめ防止専門委員会を開催している。私と教育長、弁護士さらには中央子ども相談センター、警察等のご意見を賜りながら、緊急事案、重大事案について話し合いを設けており、スクールカウンセラーの方からも積極的な意見をいただいている。状況的には担当課長が申し上げ

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

たとおりだが、今の時代のなか加害被害との言葉を安易に使うことはできず、また保護者との話し合いは極めて難しいところであり、現場教員が介在するよりも、専門的な立場のスクールカウンセラーが対応するとなると非常に繁忙な状況である。

最近の傾向では、一人の子どもが繰り返していること、また低年齢化、さらにはひきこもり関係だと自傷行為も深刻な問題である。その都度重大事案については、先の方々と話し合いをしながら、またもう一つの課題であるスクールカウンセラーが人員不足となるほどの多忙ではあるが、是正に向けても努めていきたい。

(委員) 今後、まだまだ不登校が増加傾向にあるなか、今の適応指導教室こだま、のぞみの利用者から考えても、もう少し地域を増やしてはどうか。ソーシャルワーカーや人手不足の問題等は大変だと分かるが、やはり将来のことを考えると手厚く施設を何ヶ所か増やし、なおかつ利用できるような施策を考えていただけるとよいと思う。また地域でできることがあれば、ぜひ協力したいと考えるので検討いただきたい。

(委員) 過去に主任児童委員をしていたが、現在は特に守秘義務がかなり関わってきており、地域の民生委員等に不登校の情報等が一切入らない。法律的にも難しいとは思いますが、先生方が困っている状況のなか、地域を巻き込んで地域で見守ることも視野に入れていただけたらよいと思う。

(委員) 月1回の会議にて主任児童委員、子育て・健幸課、教育委員会がともに、各学校が抱えている問題について話し合い解決へという体制を整えている。個人情報ハードルは大変高くなってきているが、学校によっては一緒に訪問をするなど調整いただいております、また解決に向けて動いていただける地区もあり、何が必要かを研究し良い方向へと進めていきたい。

(委員) 確かに今の潮流で、個人情報については皆が大変ナーバスになる状況であり、特に家庭の事、いじめ等のトラブルや不登校といった個人の事を話題にすることは本当に難しい。昔は地域の子は地域で育てるという体制があったが、今はなかなか厳しい。

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

教育委員会の青少年問題協議会でも話題としたが、例えば、学校運営協議会代表者や地域の民生委員にケース会議に参加いただいているかどうか検討している。当然守秘義務はあるが、考えをお聞かせいただくとともに、そういった子どもたちが地域にいることを理解していただくという試みをと考えている。

- (委員) 放課後子ども教室に関わっているが、とてもいい取り組みだと思う。ただ、参加人数が少ないのは残念ということ、また子どもたちと関わる地域の伝統文化に携わる方も、文化協会然り高齢化しており、後継者育成が課題である。こういった機会を更に増やし、例えばお囃子、美濃縞等の伝統文化を子どもたちに関わる事業に取り入れ、また放課後子ども教室の参加者数も増やし文化継承に繋げてほしい。

「3地域における学び」 資料1 P.6～8

- (委員) 防災意識の高揚について、先日発生した能登半島地震を考えると、今までの防災意識を根本的に変えないことには、とても対応できないのではと感じた。例えば、防災訓練や防災じぶんごとワークショップ等の様々な取り組みはあるが、何を今後行えば良いのか等を防災意識の観点から、危機管理課で再検討をお願いしたい。

- (事務局) 防災訓練について、来年度は市内中部地区で開催を予定している。能登半島地震において、職員が被災し初動対応ができなかったという声を聞いていると、やはり地域住民主体の避難所開設がポイントではと感じる。そのように方向性を整理し、自分たちが自分たちのために開設しましょうという訓練にしたいと考えている。

意識の観点では、今年度1年をかけて条例を策定しているが、策定して終わらないように、来年度も引き続き啓発に努めたい。

- (会長) 防災基本条例は、自分ごととして防災活動を捉えていただくというものを、今、作り上げが最終段階にきているところである。また広報はしま2月号において市長のコラム第111回を書いたが、能登半島地震において衝撃を受けながら感動したのは、NHKの女性アナウンサーが「テレビを見ていないで、すぐ外へ避難してください」と連呼されたことである。この動機

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

付けは先の委員からのご意見と同じである。つまり、NHKアナウンス室は東日本大震災の折、結果を報道するだけでアナウンサー全体が無力感に陥ってしまい、このような事でいいのかと、現在チーフアナウンサーとなった数名の方が中心となりマニュアルを作られた。そのマニュアルでは、特に自分の命を守るアナウンスがNHKのアナウンスであると。そういう流れを囑望しコラムにて文章化させていただいた。

市においては、地震発生時の命を守る行動等について検証を行っているのでご理解いただきたい。

「4生涯スポーツ」 資料1 P.9～10

(委員) 市ではボッチャを広めようと進めているが、場所が非常に少ない。今度の大会では羽島特別支援学校をお借りするが、コートが4面しかできない。できたら一般の人にも様々な形で広めたいと考えるので、例えば不二羽島文化センター401大会議室なども活用してはどうか。また、ボッチャの正式な器具の数が十分でなく、できれば正式な器具で皆さんに体験いただきたいので検討願う。

(委員) 昨年の意見を汲み、早速フライングディスク大会を開催いただき感謝申し上げます。

先の大会後にフライングディスク協会の方と話をしたが、一般の方たちにも参加いただくと、障がい者理解という部分としても大切な機会になるのではと思う。

ほかにも、県の職員研修課の方と話した折には、昔は障がい者は、同じクラスで同じように教育をしていたが、特別学級ができたから特別学級へ、次は支援学校ができたから支援学校へ行くということにより障がい者への見方が非常に変わってきた、と感じるとあった。

要するに同じ共生社会を求めているのに、別々の世界にいる。健常者は書類や様々な媒体で障がい者はこういうものだと思っ
てしまい、過剰な接し方、間違った理解が非常に多くなっている。先ほどの個人情報の話にもあるが、過剰な扱いをすることにより相手側も過激になるということも問題視されており、やはりお互いの理解が非常に大事である。お互いを理解することにより、歩み寄ることができるのではないかと。

障がい者が来るとやってもらって当たり前とか、例えば行政

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

行ったらこうだなど、県の施設や窓口で問題になっている。

それよりもお互いが理解する、ここまでは障がい者もやりましようとか、健常者もここまでやります、だからこうしましようとか、つまり認め合うこととして小さなことかもしれないが多く広めていきたい。

そういうことで、先ほど委員が言われたように、もっともっと参加者の枠を広げながら地域の人たちを募るなど、募集の視野を広げてもらいたいと、切にこの場を借りてお願いしたい。

(委員) 1985年前後は、支援学級は無かったがそれに代わる教室があった。ハンデがある子もみな同じ教室で、運動会なども同じ空間にいた。だから同じ人間として認め合い、お世話する方法もわかるし、ハンデがある子も手伝ってもらう事がわかっていた。だから、このパラスポーツのフライングディスク教室を、支援学校とか支援学級じゃなく生徒たちや私たちも広く体験し、一緒に触れ合う空間を作っていただきたい。

(委員) ボッチャの器具だが、県の障害者スポーツ協会でも貸し出しを行っているので、声をかけていただければ対応ができる。

「5文化」 資料1 P.11～12

意見なし

「6その他支援」 資料1 P.13～14

(委員) 電子図書でもタブレット操作等をすぐ覚えるが、目と目を合わせて言葉を交わして、コミュニケーション能力を高めることも、幼少期から大切だと思っている。文化継承の観点からも、人から人へ伝えていくことを大切にしていきたい。挨拶をしても言葉が出てこない子どもが増えてきたと感じるので、目を合わせて言葉を交わすという基本的な人間形成の分野も重要視していただきたい。

(委員) いま支援員として放課後子ども教室に関わっている。以前は教員として学校現場におり、また適応指導教室こだまにも少し関わっていた。様々な立場で子どもと接し思うことは、子どもはそれぞれみな居場所を探しているということである。先日、学習支援サポーターのような、退職教員が就学援助を必要とす

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

るひとり親家庭の子どもに対し勉強を教えるといった場所に行った。担当者の話を聞くとこだまにも、もちろん学校にも行けない、家庭でも自分の居場所がない、そういう子どもたちが、この場所へは来ることができる。なので、もちろん勉強は大事だが話し相手になってほしい、居場所を作ってあげてほしいと強く言われた。

放課後子ども教室でも子どもたちは開口一番、先生聞いてと話しかけてくる。友達の事、悩み、もちろん家庭の事も話す。子どもは意外と親に気を遣っていて、そういった事を親には話さない。学校の先生たちの悪口も出るが、私達はこの子たちのストレスのはけ口になっているのだと思い聞いている。以前教員として現場にいたときよりも、子どもと親密のようで、実は楽しく感じている。

なので、放課後子ども教室においては様々な体験活動も大事だが、地域の人、例えば竹鼻なら竹鼻の人が、その地域の子もたちにもっと関わる事ができる教室を作れば、コミュニティアイテムになる要素を含んだ事業だと思う。これからは、子どもの居場所を作る事業を地域におろし、ひとつひとつの居場所を繋いでいただきたいと強く感じている。

(委員) 資料にはないがM o b iについて、利用機会がなかなか無いため知られていない場合もある。利用を増やすためにも、例えば出産子育て支援として、妊婦の移動や通院を手助けするなどの取り組みがあったらよいと思う。

(会長) M o b iシステムは、基本的には新幹線岐阜羽島駅周辺からこの竹鼻地区市街地の約250か所を拠点に、実証実験を期間を長くとり行っている。定期的な通院や買い物をされる方についてはかなりお値打ちに利用できる。私も情報発信に努めているが、機会あるごとに市からもPRに努めていく。

(委員) 子どもたちの居場所が問題視されているが、高齢社会に伴い高齢者の居場所、例えば活動がなかなか進まないという現状である。一生懸命活動する方もいるが、人間関係等で退会されるなど色々原因があり残念に思う。

私は市民協働課の羽島中央生活学校に入っており、日々の生活で役に立てることを目標として活動しているが、なかなか会

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

員が増えない。活動において正木コミュニティセンターを借りることがあるが、市内南部在住者には遠く、足の悪い方や車を運転しない方には不便であるため人数が減る原因にもなっている。市内中心には不二羽島文化センターがあるため、安価に利用できるという。

(会長) 食生活改善の先進地は長野県である。その成功事例を勉強すると、例えば、活動団体を卒業したあとに無関係になるのではなく、サポーターとして協力ができる組織づくりがある。そういった場合は非常に効果が出るが、やはりその方法には行政の手助けも必要かと思う。行政の関与という部分もあるので、また担当課とも相談しながら善処したい。

(委員) 青少年の分野にある不登校児童生徒の段階的支援について、昔は不登校児童生徒について、学校と児童生徒、家庭とその中で関わりながら何とかしよう、という状態だった。今は、行政との連携が取れており、羽島市においても、子育て・健幸課から学校や家庭へ、また、教育委員会のスクールソーシャルワーカーや支援センター職員といった方々と各学校との連携によってスムーズに対応できており、感謝している。

その中でも大事にしたいのは保護者との連携で、大人のほうの支援、関係が善処していけること。やはり保護者も困窮しており、子どもに影響し様子がでることがある。不登校も家から出られない子、家に入れず徘徊する子と様々な様相がありながら人数が増えてきていることは各学校で課題を持っている。行政との連携、学校での努力を続けていくことに加え、適応指導教室等の各施設とのタイアップをしながら進めていきたい。

(委員) 羽島高等学校の校長に赴任し1年間、市内の全中学校、一部の小学校を訪問した。率直な感想として市内小中学校の先生方は本当に一生懸命で、ICT等の新しい取り組みもあり、粘り強く児童生徒ひとりひとりと向きあう姿が印象的であった。

先日、市長や岐阜羽島警察署長に来校いただき自転車のヘルメット着用の啓発活動を行った。おそらく生涯学習という観点からみると、県内で最も小中高の連携が図れている自治体は羽島市だと思うし、実際に県庁でもそう言われているようだ。

1点、紹介をしたい。文化の分野にイタセンパラ塾があるが、

令和5年度 第2回 羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

実は羽島高等学校においても数年前からイタセンパラの活動に協力している。先日、高校での取り組みがテレビ東京の番組で取り上げられた。本校生徒4名が東京へ行き、市と連携したイタセンパラ保護の取り組みと今後の活動方針について発表したところである。そのうち3名が、羽島市内の中学校出身者であり、みな大変立派に発表してくれた。残念ながら岐阜地区では放映されないが、市と連携した活動として紹介させていただいたのでご承知おきいただきたいと思う。

(委員) 子育て・健幸課のブックスタート事業がある。他自治体では廃止となるところもあるが羽島市は続けており、ボランティアとして協力している。最近は親子がグローバル化しており、ドイツやスリランカ、中国、韓国などと外国語教育の重要性を感じる。

(委員) 資料2の生涯学習都市づくり5ヶ年計画の目標指標の目標値は、羽島市政の基となる第六次総合計画後期実施計画にも掲げている目標値となる。10項目について、現状値・目標値とあるがすでに上回っているものもある。この目標値についてはもう一度精査をしながら、次期総合計画あるいは生涯学習都市づくり5ヶ年計画の目標指標として妥当な数値を設定していかなければならない。

意見交換終了・閉会